

和刻一葉
波之部
四

津田文庫
文庫 1
1604
21

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

倭訓繁前編二十四

洞津 谷川士清 繁

波の部

葉ハひら又也和名抄よ葉手シタとひらとよも新猿樂記ふも千葉をうひら
とよもり○齒も葉又同シテ當中曰齒シとあそハ今もむふぞく○又とよもじ歯の物
と断カタカタるを言ふハナ一又の所と脾ヒと心ハねの所を脊カニとひらて○神代紀よ麓シロ
よもりぬりハナトシム字あれハシメ生ハシメの義ハシメや古事記よ羽ヒと作ハシメ○羽ヒの發ハシメの義ハシメトシ
矢の羽ヒハ大將次將鷺ハシメの切生ハシメ也諒闇ハシメト霞尾ハシメの羽也○醫ハシメと訓ハシメと和名抄よ又ゆ
はうの女孺ハシメも是也羽ヒの衣ハシメと女異ハシメトシ延喜式元正ハシメの處儀ハシメト圓醫圓羽ハシメと
ふくへう又横羽ハシメあり○色とくろハシメ藻ハシメをと夜ハシメとよもとくろハシメづけてくよ詞ハシメ
雪ハシメのうくハシメ髪ハシメのうくハシメも因ハシメトシハシメや○てふい辭ハシメよ者字ハシメをよもりこの音ハシメ如
字書小凡言ハシメ者ハシメ所以分別隔異也ハシメとえう此ハシメ清ハシメヘ体用ハシメともふあうハシメを濁ハシメ
よもひまハシメ用語ハシメの下ハシメよあうハシメもに事情ハシメと差別ハシメと辞ハシメふうハシメとせハシメ又をうばふ
れハシメて通ハシメる所ハシメう又其者ハシメ是者ハシメ向ハシメ者意ハシメ者抑ハシメ者ハシメの教ハシメの助辭ハシメ也○場ハシメとよも

作言イフ
ラニト

ハ濁音アスカシあれとも小ハの略也○端ハモーの矢也山端軒端雲の端笠の端ふと
ムテ○俗の物のハヨリトムハ半の音也○はのきくミムニトムハ欄柄の意
ムクモ○アリアエトトムハ紀の音也又紋紀アリ○敵の城を破トムキ
三議一統ヨヌエトム方房芳防汎の假名よ用う

△とあ

著聞集よとあと笑ひてコヌルアハこの響也○歎ヨツバ雲名も

「毛よ小紋の歌ありく猩々よ似トムトム

△こま 日本紀小驛と訓セテ早馬の急語也ヒトヤと通と傳とはシテトヨ
ウルモセキ也後世ハ傳馬とのシテ

はいと

隼人トヨムラトムハシムラトモヤヒトモモロトヤヒ反イ也

萬葉集ヨ早人とも書ク敏勇の称也車の起アハ神代記小クモー隼人司和名抄
ヨスル○文武紀ヨ薩摩を唱更國トナリ萬葉集ヨ隼人の薩摩トム是也
續日本紀ヨ大隅薩摩二國隼人トスル也唱更ハ朝廷小令番と勤フよりトム史の

正義ヨ其義又トム更ハ戌卒也

△とく

史の滑稽傳小滑稽ハ俳諧の如一とえそトリ今之古今集俳と詐ヨ作

△誤ある也一音若大ハ異モリテ和哥の二体もと連歌の俳諧と近シ世の
詠ひとセアタリムニハムル也

△いたて

脛指の名也トムテ膝甲ふと脣り史記の注ヨハ脛衣ともズレ

△はく

源氏小えレ拍子の音也今ひきくとふひや反モ也

△くす

葬をトム本朝之式父爲大臣子爲無官則葬祭皆以大臣父爲無官
子爲大臣則葬祭共以無官於異邦者父爲大夫子爲士葬以大夫祭以士子
爲大夫父爲士葬以士祭以大夫日本紀小クモトムトムトトマリト
トマリモトノトマリ詞ハ日トマリタムトナリトマリ伊勢物語ヨモトマリ
トマリハトマリとの意溢トキ通スルモトマリ葬礼小夜と用マリ三代格ヨス
えて久シモ世の風俗也尤爲僧者自引導於葬處乃限父母師長及僧徒如其
餘送葬不可赴其處是佛制而律有明文ト源義公の令ヨスレ○土葬野葬火
葬水葬の品あり○我が火葬ハ釋道昭ヨ始ルト續日本紀ヨスル中臣後薛ニ死
膚断トスル賊盜律ヨ残害死屍謂焚燒支解トスルモハ晉史畧臘餘雜
錄非火葬論ホヨ議すト所精確ノム宋真宗火葬水葬を禁ム程子モ

少く論せり明律より尊長の遺言と從ふとも杖一百とスルも○使琉球錄
子為親喪數月不食肉死者以中元前後日溪水浴其屍去腐肉取其骸骨以
布帛纏之裹以葦草襯土而殯上不起墳君王及陪臣之家則以骸骨藏於山穴中
仍以木板為小牕戶歲時祭掃則啓鑰視之益恐木朽而骨露也とスルも○
明史真臘國の下ニ死る貧者ハ海濱ニ置ハ羣鴉啄ミ尽ミ家人其骨を拾フト鳥
葬といリとスル○千百年眼より今檢葬昏以己亥之日用葬取凶謹按春秋之際此
日葬者凡一十餘人此則葬不擇日可致也とスルも○蝦夷より墓以ナシヤ

シ

引ナリ

枕草紙よりそちもうなまわせんとスルも豆漿も温飽を

煮よのこもつて沸湯の轉音トヤ

トナリ
傍題トナリ字のトノ傍側の題成トムバシ近來風体は題
の物トノハふくーてトトのトトナリハヤ又款數のトノトト同書
のトトトトトスモ○俗語のトトナリヒトトナリ傍題トナリ

トナリ

東鑑右大臣家鶴岡拜賀時供奉行列の中ニ放免四人ヒズ

えたり檢非違使廳の下部とトナリ行列ハ各自ニ其分上と專ニ務る
故にて列の人数より離を頗の乱きぬやうトテ或ハ廻諱と鎮め或ハ下部の
頗ト煩トヒある時より人数より加り易い勢しハナリて行列と放免ヨリアリ
常ニトナリモ下部トトニ検非違使よつとて牛する事今昔物語トトスル
ア中右記より元永二年四月六日申云去年賀茂祭檢非違使所相具之廳下部
等或白鏡鈴等或着錦紅打衣如此過差欲停止ト又明月記より御靈會ニ神
輿渡一種ニ風流汰施すトトニ放免也冠服ト心任より用ひて貴人の行
きよどかニ又ハ故事が造り物よするもんとりと加茂祭より半より後
ユ疫病送る御靈會トトニトナリのつけぬばくセヘ也徒然草より櫻町の
のつけあとづるも是より一寿命院故より深草祭と称してある櫻町の
放免トの類トトニ祭の辯持者の手からうの人今時の練物ハ如可夫
ミ仲ちする也トモ元正紀より所奏罪人並從坐者宜咸放免トスル宋史太
祖紀より廣南有買入男女爲奴婢轉傭利者並放免トスル
トナリ
哥トナリスムと云ふトコロ映字の系へ花のタガ子露のトコロ

トナリ

哥トナリスムと云ふトコロ映字の系へ花のタガ子露のトコロ

とあるとよもう榮字をともも通せり日本紀の哥といきうちとふ万葉集より
やさういえよとよもう盛榮の名もヨー○日本紀ニ莫をよもう生の名也万葉
集ニはゆるどもヨリ新撰字鏡よひこごゆとよもう○鰐魚とくろへ速きもの
あれハ名とせるふヨー本草ニ状如柳葉とアセ今柳ぐくふとく出羽と
走よもやとくひ東國ナキシとくふとく會津ニ押葉水ニ落く魚と
あるかくくとくとく處ニヒシトク新撰字鏡ニ魁とよも伊勢鮎川御厨
白干鮎煮塩鮎類聚雜要ニスル和名抄ニ鮎をよめり埃囊抄ニ鰐とくく
えとよもうちへえとへうばくもも宇治拾遺鰐とくえとよも心得く
○南風とくべ翻譯名義集ニ婆度此云風神とくすよ本けことく風
也琉球ナモとくへう京ナテハヤツとく中國の船人五月の南風とあ
くえどく六月の風とくはとく西国ナテ東南の風をおもやくえ
とく

そぞぐとく 映ニ一毛ナ思のまゝ日記ニ野の行幸までもとくとく
くとくあり一とそ○くえやくと意同ニ莊再次讀クハ延ノの名トモヤ

△とくひあり 史記ニ切齒と讀ク日本紀と同一

△はく

淺く跡はうやことうあではうふとくハ助語也○陵もはうとく
ニ萬葉集ニスル菅萬葉ニキ葬所トヨモリ墓とよびハ跡シウモふくそ
こくとねくちくとくおもてやの跡の遺骨の名もヨー伎然草ニ
と古ニ墓をすりて田しふまねのくも小ふくかぬるやかふーとくとく
ク文選古詩ニ古墓碑為田松柏摧為薪と見えり上世之陵墓假山輒形
之上無加物近代墓所ニ社碑建者ありたゞモ墓ハ穢所也墓所ニ上身ハ一日
のけられとすはうのうまうとく松ハ五枝松とく五株とく故寛うり
○はうのいからハ詩明紀ニ墓所之碑と見ゆ蓋古ハ一周の間袞主及宗族悉く
廬と家上の構(又人)とて守るもほとえもく方葉集ニモ河島の白王
子と葬る時の歌ニ草枕旅宿ももくありぬ君ゆゑとく汝の厚き又つ
○源氏小拂もくらの草もけくとく文集ニ古墳何世人不識姓兼名化
作路傍土年々春草生とく意也○墓小碑を立ハ三位以上也其以下ハ樹
と植ふ事令ニスル墓ニ物と藏ふ事ハ饒速日命の神去たまふ時ニ

神衣と帶と手貫と三物とへ登美白庭村より葬」とさめて御墓作をと
のましもと本とんす。終制の事ハ孝德紀より其極とへ天と奉
て御身よみたまひー三種の物と其國より葬歟。然ふ列仙傳より
黄帝の冢より唯有劍在とらずか。○平語より彼より此ば、ふとくもば
との略也。鄙語よもやもくふもよの轉也。○はうのゆくぬとく俗語
ハ計略の行ふりよどもあつ。○稻のうりはうの半万葉集より今テも東
国にて植はるよへう二ハうとくすまあり。

はうみ 商量計略とくふ靈異記より恕をよみ又瑞伏よむ音く也又稱も
よめと新撰字鏡の度とく謨とはうりことより歐蘓半簡より計料法
とくろと用わく。○表とこめくものうもへくるどもとよくへ俚言の
たすくせ。○源氏よもや、ごくとも元げとうりことある。○もくとも同ー神
代紀より計とよもやらふ支る也或ハ進止とよあり

そり 等秤伏は等子とて名を稱とよき。知輕重之器也。宋の淳和中
より法物が制とく。是也。權ハ古秤也。姓氏錄より吳權其名云波賀理。吳國以

懸定萬くとく六帖よ。
人くとくひくとくよかくとくのけくとく數くうく
○伊勢物語よりつばくとくとくもく也。限量の俗俗よ足手ばくとくよ
とく倭名抄より蹠血とばかりとよめると照射より半身もとへ同意也。土佐より今
とくふ詔也。○かやくう成衡石とく。○日本紀より成より拾芥抄より十六兩
爲一斤小一斤也。三斤爲大一斤四十八兩也。とく。今百六十枚一斤とく。成唐目
とく。藥物がくさんと物よくして異あり。倭物の大しの二百三十枚一斤とく。是
と藥種よりて大よ異なり木綿より煙草砂糖より大坂西國備後の別あり
茶と宇治目山目里目の品。河より舊事紀より大小量雜器。とく。成古語拾遺より大
小何んとく。物が輕重と量る。器のとくに大小とく。用。所。鑄斧鎌
の類とと古へきる也。とて日本紀よりある劍の名よ大葉列。ある成古事記より
大量より。詩經の伐柯。伐柯其則不遠の意と近。○昔ハ稻と秤よか
一とて古今集より秋の田れいひとくとく。とく。とく。六帖よ
わうはくふくまつ稻のうをねくわくとくとく。とく。とく。六帖よ

神代紀は廢とよみはまつて音義通せりとて廢渠槽と式と通放と
スミテ○江戸にて西北の風とくがちとす

はうき 所字許字とよみ何はうと辞よらふのとやどの二意あうニ
十じう重祿と曉じうと物ふへ程也とくじうとと鳴る
と耳也又いつじう入相じう二日じうふあくら比とくじうと鳴る
とりく物と量ふうかる詞あると可又容ともよみくらばくらもあん
と推てう辞也字書よ許ハ約與之也又可也容也くらえ史記よ如も用う可の
如一○古今集よはうをと留モ一哥三首あう而已矣とつけ一助語よ似う
はううう三首あうて上よ同一

こじひ 翼とく万葉集羽我比又羽易とく又白たのはねうかと
もよみと打交とく羽のやく右より左を掩る者の雄左より右と掩ふもの
唯あると雨雅よゑえう○貝子とく齒貝の象漢土とく貝齒とく
海巴も同く紫色のものを紫貝とく上品也ハ丈嵩のものを美く紙をもり
て光滑ううしもよ是と用う文房圖贊よ貝光祿とく眼斜とく貝香

もうう○万葉集よ春日ある羽買山とく

はかせ 博士乃轉音也和名抄よアシ大博士ハ大學博士也小博士あう平
家物語よもアシ日本紀よ儒字をよめるもく月一四道の儒と称じうハ
紀傳明經明法義道とく也同紀よ博士とくよみしきよみ源氏小筆の
尻くはうせとえく○墨譜とくも博士のするするれいづる或り拍子の
音轉わとひく一れ意也とよく○舟の名よよい越前舟へ又うつと称
と鶴よ似く○博士木とく事伊勢年中行事よアスく

はう一 日本紀よ刀祝詞よ横刀とよみ万葉集よ御佩とく是也けう
せくもよ軍家よ主位よ称じう名目とく○源氏小あぬぐやうの物花
鳥よ皇子の御はうと供せしゆすは陽明門院よの事くとえく
とがく 宝鉢よも世祖の時よ始る羽虫とく飛く通用とくとえくや
錢神論よと毛翼而飛とくられ使とく猪幣也後醍醐帝の時よ始
く紙錢流行せし太平記よえり我知券物の始むとくとく

もくろ 墓原の新墓ハ土城封せざるとく孟軻之母其舍近墓とく西

土の俗稱ニ乱葬岡あると見えり一一所定め葬埋する乃制ハ日本紀三
代實錄令ふくふくそくう俗ノもすよしソハ墓所乃轉音也トシテ
トシテ化家乃三昧ヨリルニ大藏一覽ヨ如來胸中三昧之火隨声而發
逆出棺外漸々茶毗ドスモトシテ○三代格ノ桓武帝の勅小既窓之後酣
醉而歸非唯虧損風教實亦深蠹公私トスモ繁華乃地乃民今テモ亦
此嘆あり顧ミ戒シ

トシテ何の計略トキシムアリトニ俚言のあざくまきのまゝ
公量少くハ限リと極きとせむ者と定め常ナシキサシト轉シテつ寝
覺記ヨシ墓の事トシ得シテ○トシテヨウリクシメの名ヨリふき源
氏ヨシタマモ石乃ナシタスヨシアモ○トシテヨシモトシタマモテヨシア
詞花集ヨ

カトシテ人を恨しきトシテトシテをトシテモトシテ
○物語類ヨシタマノハ死る事也○定家卿の語ヨ次ハトシテ
のトシテモトシテ侍リ

トシテ
源氏河海ノ御歯固ノ本掌中唇ノアサヒトシテ其具ハ内膳供モ猪突
鹿突あくま鷦鷯トリテ代とスモトシテ世諺回答ヨ歯ガムヘヨリハカムシテ
モチハ近ハ火切ノモトシテ用トシテ本ノトスモトシテ荆楚歲時記ヨ元日
食膠牙餉取膠固之義トシテモトシテ○薑薑ヨ六月一日歯堅肝要也
トモアヌトシテ

トシテ
神代紀ノ花時亦以花祭とスモトシテ墓祭の始モトシテ墓祭
ハ荒魂の享ニ熊野有馬村の遺風保トシテモトシテ光俊
神ナシムの財ヲヤムシム人をスモトシテ

今モ祖先の墓小様をトシテトシテモトシテ本モ乞
トシテモトシテ中山傳信錄ヨモ折花供墓前トスモ天朝樂事ヨ二月朔日城
中士女已有出郭青掃墓設奠者トスモ墓ハ接神乃宅かアシナリトモ
孟子ヨモ東郭墦間ヲ本アシナリハ西土モ同ニ風俗アリトニ肥前長
崎ノ港ヨ清明ト中元ト其墳塋トモアシルト諸民墓所ヨ集ト各自ヨ饌
飲を奉シトシテ歌声喧擾トシテ五雜俎小南人借祭墓爲踏青遊戯之具紙

錢末灰鳥復相錯日暮藩間主客無不類然醉矣と見えり○程子外書は株
墓則十月一日拜之感霜露也と見えり

△さき 日本紀か榛字篆字ふと用てころともかりとも訓せり
篆も榛よ同一潘岳詩よ荆棘成榛とひかくへ針の義ある一よそ
万葉集よ針原とも云せりもさへくろ乃本ノ略ある一かくだくくふ
本萩の名今くらべてくろ万葉集よ真榛といふ物うて顯昭乃大萩と
いふも同一をどらの本ハかれとてとてとて言枝よりウ枝と生えとて
古今集よ秋もだの古枝よさけるとよく又本あく乃こくとくすりを
一種くきハ枯く春の生えてかくふとすらのとく又一種く同種み立秋あく
も八付をりて名く白をあく赤入あくれ一體源抄よつわく本あくま
れうくともかくだあれハ万葉集よ木れよ榛とかくまむよ葉子と云せ
るや奥利乃文母此信法乃山路あくよく大あく木きあくくらかくふ
もむらくらす梢よすき枝まくもく放よま機せ乃本あくのこ萩もすめ
是かのあくがみるもくとく又年あよれて若だえぬかたとやくふるく「太餘

アモチムレキを望ムシテテ宋抵旅日記みかあのさくあくもすめ
ハ金川乃く一る去年の古枝よ候するをかくすまうるよ文機せのあく
よりくらくふとくにあくくえふともかくめ殊より萩のあく一枝ざくふ
ぞの萩すくもくく一枝ざくふとくにあくくえ葉せと林とくにみ月
小を候う○芳宜花乃宴ハ仁明紀よ出く新撰万葉集よ芽とのくま
せあく唐韻よ芽ハ草名也とくつ小据きう漢語枚よ鹿鳴草とくちも
詩小雅呦鹿篇の意とく萩とよもハ和名枚ようえとく新撰字鏡よ萩を
くらと訓一蒿蘭表と注せり史貨殖傳千樹萩乃注よ梓木也とえくふ二
合字の名とそとくぎと訓せりよ菅清公尾列記よもと田と藤木田と云セ
本埃囊枚ようえくりがれひ支よう漢名きくをと花史左編よ出一天竺花
也とものり或說よ農政全書よのせ一胡枝子もくもくと又隨軍茶院
訓すり○伊勢鈴鹿郡あゆく村よ一株よ千枝あり萩あり昔大内の御用うる
とくふ○榛よ今のくの木よくの木もくひて染家の用よ入る物あり諸
國乃田間よ多く植へ是を乃業とく木とあくと手人の詠すとふ

もとより日辛紀乃素摺衣万葉集の襟原手折て行んともこ爲ヒテ
もとより衣よわせてもする物かあヒテこれと和名抄の郡名々名所
もあやくえて秦原とぞりとよみ襟原とぞりとよみの代物城
指すや杜子美う檜林礙日吟風葉と作るものとぞりとよみの代物城
く此實伐尾張よ山とぞりとよみ襟家よ用う○脛とよみ靈異記よ脣城よ
み和名抄よ脣とト新撰字鏡よ龍庭距ふともとよみとよみ古今俳諧
キ土佐日記よと小もどよあげてとしる毛とぞりとよみとよみ脣へ
今しよ而よとひ○衣乃色よと表とぞり裏毛とくと秦葉よとぞり
萩裳ひとくの女房の股ふとひ○南京とぞりと称よと小へ日光
と称よと称よとふもありとを觀つてとを萩の太ふとれ○別よ草萩
也とひとくの濱とぞり○下野国足利郡和泉村八幡山より村正真秀
氏、伐取へとくの木の内よ大神宮の三宇又ゆき安永丙申の春内宮車館
又來る正天造の物もとく奇瑞目驚くぬ小野の襟原よ皇祖天神

伏わる神武紀よス

そきざめ 元日屋中と掃除せば新よあるひ陽氣とぞりへざるに意より
よそ二日と掃除と五雜姐よ闇中と俗元日より五日すく糞土と除くを
乞令如願ノ意へとく如願ノ事歲時記よとく伊勢神宮乃俗よ客去
く直よ掃除せざるも意近一

はそきよみ 万葉集よアシ又不奉仕国辛拂部等ともあり掃除清淨
よそくの世と治むる事ひら西土より大丈夫當掃除天下ふと見えり御門
祭祝詞よ待防拂却とくとも同一

くく 叮も掃もかきくけこまではくあり○太刀よ帶字靴よハ穿履よハ
着字ナリト日本紀よ佩刀も持劍も訓同く万葉集よハ劍着を
たちもとよより又紀よ所帶とはせることよりかす反く○薄ハ音を用う
續日本後紀よ禁金銀薄泥とく○神祇伯と伯とのいもと兼良公類聚抜
よ神祇伯雖亮闇中被御吉服異他之義也とスミ家記神祇伯雖遭心來
不着服不觸穢五旬心齋籠居後擇吉日出仕專隨神齋とぞく延暦

中參議大中臣諸魚進家譜云中臣朝臣住神祇伯者是天照大神之主也思世相羨遭喪不解者勅雖不窮喪紀不可供神事宜令修其服而死

はぐ 矢とくの字別字とよもり神代紀と作字もよもり子に弦うくみとも

もぐくつ万葉集よつ強取もげとよもり又木綿と所作とそげるとよもり

榜の皮を剥て木綿とするをりて○皮のれよく剥とよもり○衣を奪ふ

とはぐとく襯字とよもり靈異記と襯とすくいあじけとよもり○木を合せて

造るをはぐとく矢と意同○蝦夷うて半寸とく音の轉あう○俗語よ

げきよはぐわるくくふあく意ある

ぐくち 新猿樂記小博打とさり今ぐくちうつとくの重言也其人

とぐくちとのくらつとくうつや物語よもえうり○大和物語よくやう

きくわやもも乞おもすくすれ足せむかんがく行んとくとくえ

くるもくくえうつて博奕うやぐくちやくせ翁よ○博奕内よに

すく残とく半東鑑よゑ四一半打ともえうり

ぐくむ 羽含の名也万葉集よ羽裏とくち菅家万葉よ羽裏とくち

又とくひとくひと古語拾遺よ育字をよもり左傳注よ今撫育人曰卯翼言
如鳥孚耶也とくえうり

はぐくは

大己貴命の天羽車大鷦鷯よのうて妻ヤミタナシニ車舊車記よえ

えうう駿河風土記ふくしよ有渡濱は羽衣の事ハ此羽車み車と謬と傳する
ふーー○羽車草ハ車軸ももてう鳥鳳花くとく○内侍所と御移徙天車
の時ハ天羽車よ載奉は常よハ溫明殿の内高床の上よ鎮とすく其天羽車の
座傍簾外よ置モ今羽車ハ基四方有欄干下車也本大己貴命の作也

くろわ

和名抄よ黒齒とよもり源氏物語紫式部日記榮花物語よ

小豆えうう海人藻芥に鳥羽院御代以前ハ男の眉をねそと鬚をはまし鉄とつ
くるま一切是ふくつ山海經よ東海有黒齒国其俗婦人齒染黑漆と
えくろり和名抄よ文選注を引て黒齒國在東海中其俗以草染齒故曰
黒齒と今婦人有黒齒具故取之と書くい頃の時すくい官家の子姓もか
ねづくふまへあくまうとくえう塩糞抄よ漣字成くち韵會よ漣乳汁
也一云水濁也とくも一説よ骨を見りすが不祥と見るより齒染丸を染

る法ありとて○史の世家より歯を大吳の國風と華夷通商考より
東京交趾も歯ある本を立てて多くを喰ふ故へとひつ
く乃きぬ
和名抄より帛とより音をうる令義解より帛衣謂白練衣と
集解より我朝以白色爲貴色天服也とそり禁秘鉢より帛御裝束とも
え胡曹鉢より帛御服神事之着御夏生冬練張とそそり弘仁の詔にて諸
會より黄櫞染の御袍と用ひきふとよもとまれ桐竹鳳凰麒麟乃御文も此時
より始むるがゆくといつ

△
ばけ
神代紀より俗語のびけばくもせゑみーーむけりへ
化ばくを魅むけとの妖物とちり伊勢物語のあよもや一口よくしてりり
くと是也むけくーの俗語も同一蝦夷よー神をとく〇ばけのか
く俗語ありかり皮く骨小對くふ俗乃套語へ孤皮をし
むけー
烈をよみうけし反ぐわれはくと云通せり神代紀より慷慨
ともよみ

むけとあると 演義文ふく露馬脚也とくすれと宇治拾遺より 程

のくけーると射するみもふうべれ化乃あくじてか性よかくの意か
は
筥箱の表とく益籠の義也ふた又は○古事記より械と日本
紀より斗と訓せり音同一○世よきもふと本とはことくふへ清墨と和名抄よ
本のはことくふある一宇治拾遺みもある女人よこよみくせりへはこゼ
ぬ日とくふまとあまくちるよーとくふ五難姐よ北人不設廁用虎子と○箱崎
ハ筑前糟屋郡也平宗盛乃安徳帝を奉して葬モ一所也○箱の浦ハ和泉日根郡
箱作村之土佐日記よ

玉くーけとこれ浦ふくみ日うち海と鏡となれうふくん

とくぶ

運とよく又搬とよく日本紀より轉とより箱ふと出く訓と書經

よ国々の土産とはことくのとく

は
袍乃後^ウ袋とくひう或ハ筥衣とちり枕草紙にとのわすく
ふきはことくとくひ又女のつむくふくはあくでたが引とくえ
とくえとくふくー引あげとくえとく

はごろも

羽衣也駿河風土記丹波風土記曾丹集ふくよ神女羽衣の本

を載らる天上皇都より降らるとして天女ともいふ也。搜神記廣輿記等によ
似る事多えらざれは本つたる事もまことに下より有渡濱の
故事へ万葉集にも見えらる能因法師の哥よ

うとれ濱天乃羽衣むくこそすくノ袖やくのもすく

伶人家の東遊といふ此故事とて辭曲を作りものもすく是り霓裳
羽衣曲と摸セテ文選注より霓裳羽衣起於開元盛於天寶也と云。霓
裳羽衣曲の舞の裝束ふと楊升庵うべく博識もあく不知様あり然つ
小野篁入唐の時此曲を親く逐一書記し嵯峨帝奉し自筆の禄あ
リが内裏炎上の時焼失しぬく可惜事。明詹仲和う雪舟う画
三富士山の題セテ詩も來風吾欲東遊去時到松原竊羽衣と作りハ東
遊の曲と聞傳へつるる。○いふをよみ合せらる梵書の故事也。○河
内の天の川近江乃餘湖のうもより曾根好忠

よこの海よそつねりかく少女子う天の羽衣ほくつんやも

○草よ羽衣と称くらへばよ用ひ著くらるる草と大小は異也

はこや乃やは 万葉集より出る蘋姑射山の御門と仙洞とや奉るよりを曰
法にて祝ひ奉るゝゆく莊子に出でる郭注より身中至寶之山也と云。俊成卿
りくらくし浦森う子ハかるどもは、それ山にぞむかむか

はまぶすかろ 蓮丁の字延喜式より蓮脚とよんで蓮丁の字仕学大衆より見え
くら金葉集よ

しつくのはくふよねろと故ふきよきよきの里人教ひゆく

△△△ 日本紀より谷字とよみるも地名。今も伊勢近江肥後陸奥ふ
く小此名あり尾張の桶はくほく所も同一。○真名伊勢物語より追字
と填くらり殿の間とくらりよて姓より間字とよめりきしハ端枝間のをくら
ー又大和物語より下すくはくはく日中行事より御湯殿とくらもア
そ西行の哥よ岩のはくほくも見えらる兼邦秋より賀田の神歛び盜し道行
歛び返し捨て逃る路に向ときよと云。今海東郡迫間村が歛び返迫間
くらふ是也

えさむ 夾字と訓せり夾路夾岸ふく是也羽狹められふく一めふ反む

信言 卷之十四

十二

あり兩傍うちるまよつてよて間介攝ふととあるとよしも同一
まふ友む俗語のはさうもきけり意同一又介へと同一一夫曰介と
えゆうの音也○碁よ幹とよめり○蜻蛉日記よみくび一夾ニはまみどえ
ゆ串よ夾みて献するよつて座よ意同一

はさう

剪刀とて夾て切り具ニ和名抄よ鎌刀と見えくふはさう新
撰字鏡よ鉗とはしてよめりりさみ友一ふそハ同名ニ洞天清錄よ倭製摺
墨剪刀足り○かうどくハ髪をくせ也

ばさう

太平記よをけ風又さうふるばさうよふけ又扇うち羽乃を
け繪ふと見えくすり披折羅とぞり今も粗扇と見えくとじ千手絆若為

降社一切大魔神者當於披折羅手と見えく

びさけ

婆娑氣する一文選注よ婆娑放逸貞と見えく又新撰字鏡よ婆
娑と見てまろがつともくづがつともよみ本てくほせり

はー

端をよみて始の末也字彙よ首也萌也始也緒也とゑ又音へん冕
ノ同一日本紀よ間とよめり間あれハ端あり通せりよて万葉集よ端とあらう間

の意あるも多ー古今集よ

木にもあらう草うとあらぬ竹のよはー我身へありぬ角くまう

四声字苑よ竹非草非木と見えく出羽うてはーと濁り呼く榜橋とよひも相
間つ所をわくとどりて名くらむり階も名同一和名抄ニ塔と見え古事記よ
塔をよめり正韻よ曲岸頭也と見え神名式よ椅をよむ字書の本義よあらう字
書小崎ハ橋也とあれハ崎と謬るゝや○橋よ石橋土橋板橋圓木橋高橋浮橋打
橋懸橋反橋舟橋棚橋吳橋韓橋等の名あり防州岩国よ錦帶橋あり
錦山より流く川よくか故よ名く日本第一の風景其結構比とくふ
俗よくうなばーとくふよそ俗よ山ハ富士滝ハ那智橋ハ錦帶とらう○催
馬樂よ橋乃孔とくふよ今もしよはーつめく○野史よ椎古帝乃時帰化セ
路子工又巧掛長橋令造遺三河國八脛長橋水内曲橋木襲梯遠江國濱名橋
會津闇川橋塊岩猿橋等其外一百八十橋と見えく○五雜俎よ天下之橋
吾聞洛陽橋爲最計橋長三百六十丈臺江大橋二百餘丈と見えく○箸を食
する橋ある金一橋御箸の渡きとふ辞あり新撰字鏡よ笑もよく今

も大嘗會の箸古尚方の箸も竹を用ひる事内膳式姓氏錄よりも中世も親王大臣よりそれへ白箸を用ひとひて箸臺とすあり後世漆箸だふあつよ文正乃比の奢小へ金をのべ沉とげづて用ひ今へ民間より象牙骨咄寧と用ひよ至り驕奢乃甚くと恨む一象牙の箸と牙筋とモハ仙草より白紙にて包み中を朱紙にて巻箸の先と銀にてはりとて貞觀乃末より白箸の翁あり姓氏をもて次白箸を賣どもて業ども百餘歳の市隱あり一また本朝遜史よりえども○八月朔日十五日禁中より萩の箸を用ひとて又事あり拾遺集より松をけりとてたく物と出でてとアズニ銀筋斐の内裏式より白銅箸金御箸の儀式帳よりそぞり母金へ鉄としふるや今も由貴乃神事より鉄箸あり大和物語より梅の花さくとてとてともそぞり天寶遺事より帝所用之金筋斐○信濃より箸をけふとてとて

ば一 言行法より背くと我爲よりぬ友をも一者どりふ破志也どりふ○助語小もて平家物語より將殿の御心より遠ひまわすふとて

類也

底ぬくと池より生てふみくらふりうくひとゆくうりぐくもふ
は一そ 日本紀萬葉集よりターラ愛字よりく愛妻ふとひうりりきせ
細トミの略より神代紀の我愛之妹とくきふるとのことく讀一〇
宇治の橋姫も愛姫の義くもつて○新撰字鏡より接をはく本もぬきくもよ
きくも

とく 神代紀より彈とよもりおもしすこ苦をもすとくとく義通アリとて
古事記より彈矢の語アリ又撥及の字へはドクダモくから反くと新撰字鏡
よ詔をうはトくとよも

は一た 偶より對一奇をうか又半をくふ間の字と同一竹取物語より
立もは一た居も一たよとアズニ元真集より
我宿より植てまよアズニ女郎花人け一たある秋乃野トクハ
○召仕のものとくふも上騰ふくに下膳をくね意をくくしたるも
らう今武家よりくわ一と女とくうは一た色指貫小つて胡曹枚より
経緯共薄紫とくふくう

はへら
柱とくよ拂座の氣とくよア楹も同へ○神ニ幾柱とくよ
事古事記神代紀ニアスミトヨテ座字とくよア佛ニ一軀をひとはへらと
み一木欽明紀ニアスミニ代實錄ニハ太政大臣一柱ともアスミトヨ古事記ニ子之一
木とくよアスミ私記ニ蓋古以貴人喻於木故謂神及貴人為一柱一木矣以賊人
喻於草故謂天下人民為青人草也トアスミトヨ大木柱とくよハ家々ニ祭
ム所の大國主金の尊像豐肥もとリて人の豊滿肥大もとモ大國ト謂名
ル如く家の中よりハ大柱とも大國柱とくよ○神代紀ニ柱ハ太く高く
アスミ万葉集ニ真木柱太き心こもつたれハ男の心と大國柱ハ太くても
太うれといふ俗諺アリモ是也○但馬三方郡濱坂ニ柱町あり街頭ニ柱セ
堅何の世よ起ると知リモ古來此柱ヨリ人の損傷もるる

はへる
走とくよ走反とくまれハスニ同へ歎るも常るもくよハ奇文讀
ムシテアヒ習マ新撰字鏡ニ逆とくよカタトヨナク日光ト行
事とくよろとくよ○刀の自レニ拔出ふとはくよ玉乃盤ニ走あくよ
如一列仙傳ニ其人刀自墮而自支トモスミトヨ火りて物を焼てけふ声

と炮声ニアスミトヨ安藝の俗語ニ身の疼むとけふトヨ
モヘキニ 繢紀宣命萬葉集ニアスミ神代紀ニえどヨミ或ハ本トヨミ又始初
トヨタリ端芽の氣ある風ニ出羽トモ志を清て唱フ又肇甫載哉造助トモユ
始と注モ始者ニアスミ

はへる
端部の氣あつて物より半節とくよ花鳥ニ下ハクシテ一けく板か
と打て上よ節と造ア外アくるやうに走るトヨトヨ車も同へ
モヘキニ 日本紀ニ間人トヨアリ氏姓よアリ今も丹波ヨミリ有ルモアリ
又塗部とよアリ土師人の氣あつて

モヘキニ 鶴がゆ和名抄ニアスモこのモハ鳴也モヘタトモトヨ本ハ速鷺の
名轉トヨトヨトヨアスミトヨアス又鷺の家トヨトヨだいトヨモモ是也トヨ
アロトヨタリつまトヨ詞ハ鷺がつよ体よア
はへけや
万葉集ニ愛哉と書ミ又早布屋師トモアスミトヨ助語ハナ
モヘキニ ヤヘヨの轉る日本紀ニハアキトヨトモアスミトヨ
モヘキニ 万葉集ニ父母ノ成乃ナトモ著向弟ノ命トヨモスミ著ハ一對

このゆゑよあひつり今俗箸折屈の兄弟とくは是く古萩の折箸ふとくへ折屈さて一對ともなきへ又童謡にはいはきすぬされとくは箸折ま折くらむ。一され古の時よ箸竹幾株かくらひも今のもく二條と一前もとくらくよひあひ細く削成する一筋とおりうりく食を取るべとすはーたふー無間のえきて物よ蘭にふく意よや一説端方無てふ言也せんくらふへいそくわし源氏小はーもあとくわい心うち意也和泉式部日記くらきの神もさくらへおりしきめくめちよやくはすとあくすく

○真名伊勢物語に強の字節用集よ魁魁の字をよろり何よ出るや字乃考もく得りく

はーとく
支書うきー源氏よ点ふがよはーと書とえゆ又徒然草
よだえあう東坡う真如立行如行草如支こくよ意うふて草書をほめる
語よ龍蛇走どくふく文集よ支筆還詩債こくすくあり

もくばくふと
天武紀よ圭冠とよより私記よ鳥帽子也とくう榛子の形

鳥帽子よ似くうよて名くるよ今侍鳥帽子とくう説ひうけはく人〇京

室町鳥帽子折の看板よ十一とくもも圭の字の略ふとくとく

△はす

駆とよもハ羽するへ疾速とく〇蓮とくふへもくす乃略也はす根
藕根も花葉も藕生するものへはとくのせんへ藕粉へ説邪よんゆせんき纖
字あくーとすれいとへ藕糸へやとと荷鼻とくみ侍中群要よ御手水時有千荷
葉〇うきはとあう浮萍のれく〇荷葉よ酒と入て茎より飲ハ香氣あうて
よくーと陶器よもると酉陽雜俎よ碧珠杯とく〇はすふくぐふと
りくへ斜とくう蓮のすく奈よくふや昂鼻とはすくう鼻ふくもくと
又褰鼻ともいは近江乃湖よはすとくふ奥あうてその鼻乃形うげう嘉魚
ことくと海をす川ばすの品あり較はすハ吻よ粒あり方ぐくへ胴けく〇小児
の頭瘡よもくね林とくふへ蟠拱頭也とく蟠ハ土蜂也

弓よ蒲とくひ矢よ苦とく端末の矢よ古事記よ弓端をゆく
とよみう弦のさくらひ弓をも苦とく万宝全書よ弓とく箭よ矢苦ともい
ふ皆水精也但諒闇よ角苦也〇消へまへ弓脰なうりび〇俗語うけはす
一へうよう出くう古事記よ弭弓藏兵とくとくとくのあふあるの箭よ弓

佐言卷之十四

一

陸機詩よ離合非有常譬彼弦與苦とアヌスモリ○木よとすあり原山査子の如く紅葉をはや

ハセ

長谷又谷字とよみハ泊瀬乃略也泊瀬の枕詞よ隱ロトヒツトヒ
ハナタコトム公任卿の別荘の地也○和名抄よ玉茎をとせと訓チリをはせ
ぐとの條考ふ全一○鎌倉ノ海物よはせあり栗刺イカをフタリ如レ貝の刺其刺
と紀州より香箸貝とら

ハセツブ 文部とより和名抄よ杖部ともあり日本紀よ塗部を訓せるも

誤ふはちうどよむ

ハセテ 端袖の衣あり

ハセ 話語の辞よりよハぬとの轉る一並てくらし詞よ將字とよみり抑
然之辭と注せり柳ハ反語の辭とつよそ神代紀よ抑ともより又將抑ともア
ウ西土ノ文よ上句よ柳字と用ひ下句よ將字を用ひあり或抑將と連用せり

古今集よ

時鳥初声聞へあうちもふくぬ一一定らぬまきるけく
こすみもすみの意あり日本紀万葉集ふとよ為當二字ともよみり
真名伊勢物語よ當將二字を填も伊勢物語よ女とありとも思つてそ
と云ア又万葉集よけくやもしもハ一端をけくとくハ一たぶ同一○機を
繒物の略称よくりと繒をよみり羽手の手よ日本紀よ出て機も繒よ
Pを出するふくア一少しきばくハ花機と云アもともハ腰機とら○旗ハ
羽畠のえくア一旗よハ幾流とく車延喜式よみえく考工記よ幡旗旗之
様名也と云ア錦御旗ハ元弘の初帝笠置山よりも多々時を始て太平記
よみえく赤白二幅の絹上よ懸日月とくア一幟へはくとぢく一祭儀よ
旗を用ひハ神代紀よアスエ葬儀よ用ひハ常陸風土記よみえく高市郡よ
波多神社あり冬野村よまた復仲紀よア羽田と同一くア同郡よ波多郡井
神社あり羽内村よまた姓氏錄よ波多祝波多造あり○神代紀よ贊又贊背よ
めう奥の旗よ和名抄よ俗よくいきくとく神代よ奥を贊廣物贊狹
物よくいきく○狩衣よくいきく贊字を用ひ○陸田をくふ火田へ古草葉を焼

傳言集 卷之廿四

七十

てこやセー ようの名也 烟字島字ハニ合セ一宇ニ或ハ墾田也と云フ○姓ニモラフ
脇屋義助の部将よ烟時能あつ○はくともか詞ハ檔乃字をよひ半書の云義事
に累シテの名もアーフトシヒハはつとくニテ磯字とよあるハ名を取ヒ演義文よ
る撰地の意也○万葉集吹^キ黄^{イエ}の刀自うすめ^{スメ}波引の横山れいもんと云フ伊
勢一志郡の波多々大和より出道すぢらも千山川よ多^{タカ}神鳳抄より大^{タカ}作
ふ一説^{シテ}山邊郡の仲峯山也其山下と云ふ野となり又式神波多神社も仲峯山村
云あつ○土佐の畠^ハ土御門院の徒さんませ^ス所也 懿多郡と云保元の初年效音
院師長公も流され後醍醐帝の一宮も配流^{ハシナフ}たまつ

はく
萬葉集より皮字をよみひはくきはぐの敷^{ハシナフ}ヘ端のあらや○新撰字鏡
ノ脱^{ハシナフ}とほくふやけ^{ハシナフ}○秦とよむハ秦氏始て紺綿を造^{ハシナフ}て肌膚^{ハシナフ}とあ
くもすうを訓せり古語拾遺^{ハシナフ}云えども○永正記より神宮法不知姓職掌号秦
氏例也と云フ

はく
倭名鉄^{ハシナフ}より皮方の字也 肌ばか^{ハシナフ}とよみ

はくけ
圍^{ハシナフ}とけつこうを孔子も老圍^{ハシナフ}との云う日本紀より或をよみ常^{ハシナフ}に畠

トヨアリケハモノの名物と殖つける事あり○和名抄より別^{ハシナフ}若聞集より馬
の事小け^{ハシナフ}かと云ひ世紀物語より御馬めー出で^{ハシナフ}せく^{ハシナフ}セふとせまを
きとえ^{ハシナフ}今も物のし著^{ハシナフ}るを落^{ハシナフ}よけ^{ハシナフ}と云フ○大手をはく^{ハシナフ}か
づ^{ハシナフ}開く^{ハシナフ}也○和名抄より疥癩^{ハシナフ}をよみ

はく
古事記より大宮の城^{ハシナフ}と云ひ彼津^{ハシナフ}の名^{ハシナフ}や万葉集より國え
盡^{ハシナフ}とも國之波多^{ハシナフ}とも云ひ云のはくてかくし^{ハシナフ}もがく^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}後^{ハシナフ}略^{ハシナフ}
て^{ハシナフ}と云ふも^{ハシナフ}と云ふも^{ハシナフ}も^{ハシナフ}も^{ハシナフ}も^{ハシナフ}も^{ハシナフ}如^{ハシナフ}一^{ハシナフ}年も^{ハシナフ}黒^{ハシナフ}通^{ハシナフ}俗^{ハシナフ}と
はく^{ハシナフ}と云ふと盡^{ハシナフ}み意也○贊^{ハシナフ}手^{ハシナフ}もあつ日本紀の哥^{ハシナフ}より^{ハシナフ}はく^{ハシナフ}と云ふ
も○機手の名もあつ堀川百首より

はく
和名抄より範^{ハシナフ}を訓^{ハシナフ}一^{ハシナフ}飼^{ハシナフ}馬^{ハシナフ}籠^{ハシナフ}也と注^{ハシナフ}行^{ハシナフ}の馬^{ハシナフ}出^{ハシナフ}語
ム^{ハシナフ}一^{ハシナフ}馬^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}宿^{ハシナフ}治^{ハシナフ}拾^{ハシナフ}遺^{ハシナフ}よ^{ハシナフ}そ^{ハシナフ}行^{ハシナフ}旅^{ハシナフ}人^{ハシナフ}と^{ハシナフ}として馬^{ハシナフ}と^{ハシナフ}養^{ハシナフ}
の制^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}一^{ハシナフ}孝德紀より^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}馬^{ハシナフ}刷^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}の
和名抄より又俗^{ハシナフ}旅^{ハシナフ}籠^{ハシナフ}の字^{ハシナフ}を用^{ハシナフ}も^{ハシナフ}今昔物語小宿^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}はく^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}開^{ハシナフ}物
ふく^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}今^{ハシナフ}風^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}ア西^{ハシナフ}の書^{ハシナフ}小^{ハシナフ}行^{ハシナフ}旅^{ハシナフ}籠^{ハシナフ}仗^{ハシナフ}お^{ハシナフ}と云^{ハシナフ}

倭言 卷之廿四

今旅店とはもどやことひハ館驛也○俗よ機をほもどりすとご乃如一○石見國よくまの本城もくことふ

はくふ 神代紀よ責字債字徵字ふととよもくはくふ意通^{ヒトシ}を今も出羽此語あり○庭訓の徵使定使と見えく年貢す就てくを

はくせ 雪霜の欵よもやう大日經疏よ鉢鉢羅葉也大佛頂云白也と見えく續後撰集よ庭とくもくよ雪降よりうととち舊説よまくと通じくらすまくと梵語也越後よくやくく降雪城ひ東武よく綿帽子雪とくみば中国よくうき雪とくし越路うてやく雪とくし西國よ花もく雪とくふ○竹のくれとおもいの義也とくもんと葉實の義すとくもや○万葉集よとくものいきのうううとくも用の詞試体よくひける也とく

はくう 裸をよもう唐明の義古事記よえゆ

はくし 新撰字鏡よ既とよも後既も同じもどりあしの義也○神社よ

はくじや 幅員とくふ埃囊妙よ布の一もくばかりと見え平家物語よひのまく

ぱくふくえくう機張ふと一玄々集觀教僧都

水うみよ秋の山道のうみうけくもくしりうき錦とくろ

たぐたち 中臣祓辭よ生唐断死唐断とアミモク人と傷もまづつけ尾を

りて刀をためとけとく殺害のまくまとあへん

はくかく 神代紀よ織絃とくもく万葉集よ織はくももく

くもくあー 日本紀和名抄よ旗をよもく旗脚の義也

はくめく 令義解よ真幡寸^キ別雷神の轟神也と見ゆ山城國紀伊郡真幡守

神社ハ中島村城南神乃森よあく月清集よ雨と城南神よ祈りく

霜降之日帥府致祭旗轟縣之神と云サク

祭蘇文ハ柳文よアミ旗轟縣神と祭み禮ハ虎鈴經よアミ熙朝樂事よも

△△△ ちをすぐ雪恥と書よ韻會よ雪ハ洗也こゑえくろ○埃囊妙よ舍嬌とはがくらふとよもくはぢらふとくぢうくふとも同一○恥を與ふとひだるすとくふ古語

古事記の令見原は吉とスミテ神代紀の令吉、駆辱とスミテあれはばぢんせすなどとより
はちふく 源氏物語のはちふくらじとんそくう蜂と吹く如くの意、もろて体と
か詞かう東坡も虎をキうちよするのと峰をふくこづくと身細流み蜂もくしむ
とくふく如くとよえく

もちまわ 頭の鉢と纏の身也古ハ抹額タケツとらす○蜂巻の革カニふ物ハ鎧伏着て
其腰と纏もゆ也鎧と着くる体ハ細腰スリヒザシなる所とてあり名く大和の古寺カマクラは古代の物
遺モトム

はらすのもひ

和名抄より當と訓せりくらひ延の身タカラシ一新撰字鏡カスと荷本の白
くきこくあら爾雅の注より茎下白鶲在泥中者也とくらひ延喜式より荷葉、雜葉七十五枚
波斐四把半と入アシガ耦牙也と注と後撰集

蓮葉のくしるくへせりむせりへしられ中より生つ

顕照の説よりくも身をちうまくひとくへ其心也とくらひ二義を兼者の意也

△もつ 初とよむハ端出ハタハタのあらう一三代實錄より早をよめう○日本紀より泊字
とよむハ舟をはつぶとよ是也とぞくとぞくとぞくとぞくとぞくとぞく

ミハナリみてくるをあひ古今集よりまとつるふくは是ふく一又やうひと
つれともよもう○大魚の名よりふへ初より出ふ意鮎の幸より其ちひとよ
よきひとよき○定家卿鷹の哥よ

鳥羽の黒ぬの身タマハシやはくとよ是の三つあるとよく

是ハ黒ぬの身タマハシの逸物ふくとくハ重羽の雉タチの者ありと鷹と蹴ころ
もとくらう○し未夏琉球乃漂船ハタハタニツレサハつとあるハ船の道具ハタハタ
丁海道記より舟を渡る事をもくとねにけつをりくまよこまはる水
をうきくわるとくえゆ私字ハタハタとよもう是もとおりしよよ船中より用ひう水を
溜ハタハタふ桶ハタハタへとよけりもとあうどうつ時より用ひうしもく也
はつえ 古今集より梅乃しつえとよもく極枝の身梢ハタハタをしよある一万余集より
木枝ハタハタをはつえとよもくに同く

もつう 廿日どすもひあつれ轉ハタハタくる詞ハタハタ一〇廿日正月とよふ事文

類聚より江東俗號正月二十日爲天穿以紅縷繫煎餅餌置屋上謂之補天穿ハタハタと云
えうる女の鏡甚室の祝ハタハタも廿日を用ひう初顏祝ハタハタとよ矣より取あつて江東俗

○本けるるまゝ一甲冑の鏡開きも亦りくせ日を用ひ一刃柄を祝ふ事くとらう○
はつゝよえて一草のはつゝよみと欣よしむひもくの意もまゝ一方奈集より小端を
よめう

はつこ

日本紀の孫字裔字をより極子より舊事記の裔孫ともいゆ

はつわ
祝詞式より初穗倭姫世紀より先穗ふとさう稻穗のすゞあうミキスを神より
あるよろ萬の物の初とも神よりあるひあらうよそ三代寶録より錢のまゝ所鑄作之早
穂二十文と見えうる或最花を訓せり天野氏の書より

さつき

顯昭説】下人の物ふとけくまと木とくふくらえくまの舟もる

意よて泊木れ若まゝ一後堀川百首に

わん衣今やはつまゝけてかとかつまゝてなきよたあす人

○辛螺殻の口より長針なり左右にある物を名うるゝ同意成一刺螺也とらう○女官の服ニモラテ地白絹のしめ地の如き小袖也せう内よさく目と称する官方より典侍すと内々行事より○琉球よりつまどりハ針衝の名まゝ一其俗以墨手を點く種々の化粧の状とふすまとひ女のまく暇東の婦人唇小入墨す

るう如一

はつま
古今集よりとつけて極き美く俗よやつまるともらう

もつう風

そつせざかくもひづはつせうまの略也○二月初午の日と稻荷祭され

貫之家集より喜六年月次屏風歌の中より二月初午にあつまつてもく所と見え

アサコモキマフマ一○須集より二月初午のぞくろ

ひうりて花とくさく花の香を袖よけみつ罪もととある

もつまとくせう此日も花つゝく事あくまや○新撰六帖

さくろりやくま初午のちくまくあくせれがなつまもく

是ハ松と桜頭花より平治物語より大貞清盛のうけの社よりおうて各松乃

枝を折てよろひの袖よくまとどえまくへ初午あくとあくま一
有家のキよ

いふま山松乃青葉をまくつ帰ふへもくまくふの諸人

今も紀の熊野より初午の日神をまくよきう古の遺物もくへ午の日を

用ひ神の初で現をたまふ日あれハ永く祭日とおもふどらう

妻川子承

卷之廿四

三

こつる。

春日祭年とあ二月初の申の日也堀川百首よ

はづく
二月の初申日をやま日山岑とよむまでいとす

聖をつねけづくまきしもむちうみとくはづくめうへ

今聖のまとう忝辱をよもじとづとへよすと四書蒙引よ聖由内生辱、自外

生とえり○もうの森の山城、山訓郡へ和名抄よ羽束をばづとよもく式羽

東師坐高御産日神社大宝元年波都賀志神神稻今俗聖——ごく杜もく

もづくらひ 和名抄よ歛とよも羽繕ふくらひ又つま玉篇よ嘲ハ鳥治毛衣一

とえり

△とて 古事記よ最後の字とよも万葉集よ盡又終又竟をはてとくみ

とてるともじて極をはとよもじ同へはくあまなまくは是也くとくとく

も同へ朝忠集よ

人乃世の老とほてふ——せす——あすもふけうき——

○もつ木とてともじ羽手の不よや堀川百首よ

宿りせよ朝ごと稻をほそとくとてをゆひてうく——うりきよ

○俗の發語よもじう○神鳳牧よ伊勢一志郡蘿原御厨波底御厨と載て今曾原の邊よ波底村あり式須佐神社も一本須を波ふ作ふ是也

はてのひ

竟の日也日本紀か國忌日をよも三代實錄よ四十九日とよも

玉笑零音よ人之初死以七日為忌一忌而七魂散故七々四十九日而七魄汎矣とくア大藏一覽よも中、有極多七々四十九日定結生とえそく拾遺集物名よ四十九日伏隱——已がふくすく散ぬうとみう諸廻向清規式よ四十九日と大歎忌——谷饗集よ七々日及百箇日一周忌第三年忌ヤテ六十王經よ配せう蓋百箇日一周忌第三年ハ儒者の卒哭小祥大祥小准とるもく七年以後ハ誰定め——とくふ事とおもく十三年忌りふくふくとく六甲子終て七年十二支尺て十三年と數——もく胎蔵界の十三院よ象ふていづらう五難組よも死毎七日則備三祭謂之過七至四十九日而止措紳礼法之家不爾也死後朝夕上食至百日止とくふう今俗五十日といふへ生よくふう如く源氏よ四十九日とあるを細流よみかねうとよもんく三代實錄よ

君くする涙へきひもあまうのを今日とハ何のけとくらうん

△はとく 服部をよろづ日本紀より織部とよも又織部ともえくはく草
の木たお及とみう古語拾遺より秦機織シモツル也大神宮式より服織女あり神名
祕書小以女子号織子以男子称人ヒト也○伊勢多氣郡より服部伊刀麻神社
あり今機殿と称もととまに祭女まで祭女ハ織子をひく又奄藝郡より服織神
社ありよも同一和名抄服部より是雄略紀より伊勢衣縫之先也と是も大
神宮式より和妙衣者服部氏荒媛良者麻績氏タケルを神名式よりも麻績神社服部伊
刀麻神社あり○はくまは女孺ハ執醫の女ヒメ其醫ともはくも續紀より奉醫ヒトツリ
美人更袍袴モモロシ○伊勢羽坂山東鑑より多氣郡タカシマや志太義廣と殺せし
所也○伊賀の服部ヒトハシ式より阿拜郡小宮神社也酒公の靈祠也とひく
服部平内左衛門家長より盛より六條院の時真羽の矢一千手車より積て宣下り
とひくとくの社ヒトハシ式より阿拜郡小宮神社也酒公の靈祠也とひく
はとぬく 秋の始め鳩をくぐり人の鳩の鳴すねどもをひく顕季の秋より
ぬまとき枝より風の涼しきがふく秋よりやゑく

童蒙秋よりはとづいきりとくすとすき意ヒトク又蠶ヒトクより麻ヒトクを待つ
人とどもくどもまく人よりまくもくせんどもなふく本ヒトクをする也

すとくをのぬく秋の音ヒトクとまれとくとくとくとくとくとくとくとくとく

はとく

妖巫の教ヒトクとくハ幡神ヒトク小託ヒトク一鳩の飼料ヒトクとしとからまよや或ハ

鳩の卵ヒトクとちう又定家卿ヒトク鳩の教ヒトクよ男山鳩ヒトクやうしたうたうはうとたえ注ヒトクよ鳩

比秆ヒトクの故事ヒトクよう歎ヒトクじう經國大典ヒトク徐居正序ヒトク鳩ヒトク養物語ヒトク

△はふ

花ヒトクの春化ヒトクの訓ヒトク義ヒトクよ神代紀ヒトクよ春ヒトクを花ヒトク時ヒトクと見え唐音ヒトクともさみ

とくすの草葉ヒトクとて千葉ヒトクの音ヒトクとてせくよとく又ハ重ヒトクか樓子ヒトクやぐくときく
筒子ヒトクはくとくの花ヒトクの雲花ヒトクの雪花ヒトクの波花ヒトクの滝花ヒトクの袖花ヒトクの衣ヒトクと教ヒトクよと
くす花ヒトク○花五色ヒトクごらしき独黑色ヒトクみど蟲海集ヒトクよええれと蠶豆ヒトク乃花ヒトク
黑白ヒトク分明ヒトクよりあり群芳譜ヒトクよ黒梅花ヒトク黒如墨ヒトク或云以苦棟樹接者ヒトクとあく○

古今集ヒトク

年をとへ齡ヒトクの老ぬもくあれと花ヒトク一尺をハ物ヒトクわくもく

是ヒトク詩ヒトクよ窮窮淑ヒトク女君子好述ヒトクとある如き深殿ヒトク后ヒトクの風情ヒトクとくとりく照ヒトク

てのへあふるう○花とのもひして櫻のまゝなる後の事へ鶴林玉露」洛陽人謂牡丹為花成都人謂海棠為花尊貴之也」と云々鎌倉右大臣集上

みくわ山に入り山人どもうえうふ花よあくやや

古今集官家万葉ふとも櫻どもむへ勿論また花とのもめるき百花どもすそ詩も其意よええう○農家よ花とくは紅花く○三はふ四ふなう人の行よう六花のあよそめなうよりの詞ふる一○鼻ハ初物のはしわ半のとくを皆はふとくう鼻祖のとく通つ方言よ梁益之間謂鼻為祖ともえと韻會よ人え胚胎鼻先受形故謂始祖為鼻祖とええう淡路三原郡鼻子山とくしごやまとよみう○帶上窟詮よ欲知時辰陰陽當別以鼻々中氣陽時在左陰時在右亥子之交兩鼻俱通丹家謂玉洞雙開是也とええう○鼻根の奇ある元興寺の僧守印入本とに明紀よ記す今も鼻うあり○俗よ自負すと鼻と高うとくらべ天狗の像とりてくふよさくと秋葉山の像へ嘴長くとも或ハ猿田彦神の化神とくと神代紀小へ鼻長さとくと云れられ王鼻と称するも圖一かくふくい物ふる一○源氏よ鞠の所よ人へ鼻のうも走まく心よ入すうとええう

○奥義坂又武隈のまよとして山のまへ出る所えと去せら今テも一所の名よくふとくとはふとくもくとくの多一鼻田のまえ山鼻ふともふ名義も同一○花の御所ハ義滿將軍の室町殿とくう花鳥ハ室町新第とくう花の寺ハ訓郡大原郷村の小塩山持勝寺とくう西行法師う植一櫻あう長嘴菴の跡もあり

はよき
新撰守鏡よ施埃囊坂工細常よ縲をよろう碧もすく同色う白侃西碧とくひ一を玉元美ハ縲よ作さう花田のまよ月草うそ塗ふぞりく名くよや故よも月草のまよとくう今テの花色くとくう華田の字夏候湛う賦よええくはふく草ハ月草の異名ふう○もよく帶ふくの紙ふく又ふく日本紀よ紺をふくもくとくう源氏よあくくくくそそく藍うそ薄くわくらへ口語よくもせ意へ○續後拾集よ

石河やあくよ妻や結ひ置一花田の帶のうつうやそそへ
催馬樂乃意ふる一石河ハ河内國の郡名
ちふふ
離とくう瑞よみうのまよ

放をよみうもく意へはふとくもくう神代紀よ毀とくう流

傳記卷之十四

之とくみちやつまきとよもり侍中群要は放紙事とくゆ上中下とあり○矢
とはふつて號字○靈異紀よへ脱とよもり

ふし 相聚アムル物語をくふ說文よ咄ハ相謂也とくえく無端の義か
トシ 天武紀よ問王卿以無端事トクスミ莊子所無端崖之辭トクスミト

はふどう 花鳥の色音ふと常よ欵よトモリ四季花鳥とくふ事あく春ハ梅よ鶯

夏ハ鷗の花よ時鳥秋ハ菊小鷹冬ハ雪花よ水鳥くとも〇文集よ天宝未有密采
艶色者當時号花鳥使とアミトロ

まやう 白氏文集の聲華派よトモリ也昔為京洛壺華客今作江
湖潦倒翁ハ声聾功著潦倒切老トシ一宇ハ開く二字よ召くる也是西域二合
の法也

はふがき 上東門院南良乃都ハ重櫻を戎櫻と名クと伊賀國よ余野ト
くふ庄と寄て花垣ノ庄と名ケ此木よ牆をセララ花の盛トヒ七日つ直い
て是とちせんをリテ今よ彼庄寺領ト砂石集よツミテ新續古今集よ永

仁大嘗會懸紀方屏風よ花垣里

白奴の木綿とうもで神ナリる卯月ふくらむ花垣ノキヤ
○兼好集集よツム菩提樹院の藤も冊余野村よアリ伊賀郡也

まつて

古今集集よヤヨヒツギリリハ日花つゝよリテテリ女トモモトアミト

花供の用小野山よ出て摘とくふよみつね集よ花摘

寫ハシカタナカタナカタナ香よめて秋つむ色外カカヘ

昔ハ春の内よたまくふとも野ふ出て花のらうくとく手向ヤテ无縁の靈
をくすりひきふキアリトトク六帖よ

舟岡よ花つむ人のほはてくと行らんとやらつと

はふぢめ

花深の春月草の花りて深ふをくふ古今集け世中の人のハ花
やものとくと六帖よつと草のとく

まむれ

餓とくふ致書よ多く馬のくふむけこれら旅立人の馬の鼻よ向ひ
餓別すがれ意く飲食よ餓トクヒ貨財よ贋とくふ又代トセよど程儀ふと

らう

はふぢめ 新撰字鏡よ噴嚏和名鉄よ嚏とくすりひきの音もくー

奥義抄よりはるゝはるゝはるゝもせん半人乃まをたりし今ふとあひ
づれへあくとくらう古今集より

出てゆく人とくわくすくあまに隣のくよけふもじみふ
顯昭の説より人の所へ行くも隣の人乃喧づれへくせくくくん人へ立
どきくそくとくとく詩よ頼言則喧嬾オモフテコシ真子ナミ俗説以入喧為入説とくひ居家
公用ふ噴嚏ハラハラとよふ日の辛ハリえくら枕草紙よもぐりがほふるの五月一日のつ
あてそくはあひる人とえ袖中抄よ正月え日喧れの長命乃祥ハラハラ
ヒ傳ふとえくら

はふぐく
丹鉛總錄より越中牡丹開時賞者不問親疎謂之看花局澤

國此月多有輕陰微雨謂之養花天アマスカニ

何ぞれく雨よへふくぬ花曇咲ハマクロハニ二月のキ

さふのあよ
花の兄ハナシ梅をくふ諸木ハナシ先ハナシもて花ハナシとりてらす也ハナシと裏ハナシ
魁ハナシの名あり山谷ハナシ水仙ハナシの詩よ山礪是弟梅是兄ハナシもスミテ菊と花の弟ハナシと實

業卿

花すくね梅も咲り一トキのふくとくの花の後ふも
はふをやく
古今集の序よ花をくふと便ハシアム所よすくひとくらう花ば
諷のよくや又程明道の詩よ傍花隨柳過前川ハナシとくす意ハナシく

さふよちふ

桃よのくらう朗詠の句よ天醉干花桃李盛也ハナシスミテ支本集

3

天の川岸ハナシの桃や咲ぬ人空ハナシ花の色よきしむ。

はふぐく
日本紀の欽ハナシよ桜ハナシはくけの花の中よ殊ハナシよ愛ハナシたくれて花細よ
一野ハナシ萬葉集より

さふくづみ

鎮花祭ハナシをくらう公事根元ハナシよ是大神狹井ハナシの二祭ハナシをくらす神祇令
小のせくう又松尾の神社ハナシよあり和列三輪山の内ハナシも鎮花の社あり花のちくふ春
の比ハナシ疫神ハナシ散ハナシて人をふやまんゆゑよ此祭ありとくらう又花鎮宮ハナシ訓郡
上久我村ハナシ新拾遺集より

長閑あるまの祭の花ハナシ一つめ風ハナシとさすれとお行ハナシあ

はふのいと
鼻の糸の糸ハナシ小児の守ハナシみ青き糸ハナシつけて児の喧ハナシふ時ハナシふと答

と代すよせ系ともすふく是ハ乳母のあらへ母兒のまゐる時うりの人に
鼻と合ひてスミモモコムはふ合せされ其變る児よ害あつてふ故
のすくあひそらう尼のやしもい君のあようぢ一車徒然草ふえうち
まふをつく 俗よ生君の前遠さるをうすまつて物語よ皆もまつまれれ
ぬとえ袋草子よ小突鼻氣也とえうち

ふのちく 花の弟く菊をふ諸花よ後もく花まき殊残花も称する物也
まみのいもや 増基法師熊野紀行よしゆ有馬村く伊弉冉尊とくしまつて
る町こらす花時亦以花祭とくよ据く繩りて旗と造すもとひあつて神とつ
けて花とせと夫木集よ

神ほつる花の時よや成ゆく人有馬乃村よしむ白ゆ

はふやくや 源氏小花や蝶やとけいわきあくあくえゆ枕草紙よ

みふく花やくやとく日も秋ひとく君かくとけいわ

まふよをくはく 源氏よしゆ花よ心を折るく俗よ我かくふとく

けふりもく 鼻とし絆のくふひよ達くちくとくひちがせり万葉集

まゆ根と鼻ひ絆うけやくもくもくとく思ふ我君
へは小 日本紀よ埴又土とよりく你どみの略よづの古語ふくへ埴ハ黄土也
と注せり万葉集よ黄土も赤土もよみる○老子よ延埴とは小を你やとくよく
来きう

はふく 土師の字をよりくべとよもく略くへまるの音ふあくと土輪
ふく造つ初る後と土師氏と賜ひ一車日本紀よえをく○和名抄よ黃
櫨とよりく略くへてとくともく○遊女土師ハ万葉集よえをく又蒲生珠
名抄古等の故ものもく

はふく 萬葉集よ黃土とよりく其の事とく生の音也○植生も訓同一
く小可 日本紀よ埴輪亦名笠物とえり岳仁天皇御時よ始より私記よ山陵
綠邊作埴人形立如車輪者也とえり今諸國陵墓の古きよび多く甕の形と立
並てその停車輪の如く塚上よみく理り是所謂埴輪もく一河内應神天皇
の陵のくふ播磨仲哀天皇乃荒陵の花壇かと称するも是也

は小豆豆

和名抄ニ半月をトムリ半月ハ五種不男の「ある」一内典ニ又シテハ

「つは小ハ半の音トムリ月を二ツ小割て男女の体をアハシトムリトマシテ誤ミク
シムリともトムリ 埼襄抄ニスセラ本草ニ五不男ハ天捷漏怯變也天者陽
瘡不用古云天官是也捷者陽勢闇去寺人是也漏者精寒不固常自遺洩也怯者
舉而不強或見敵不興也變者形兼男女今アハシトムリ本草ニ名ニ形トミシ

和名抄曲調類ノ埴破あり

トニズム

和名抄ニ匱トトミテ半拂の養俗用稼字所出未詳トムリ拂あり

て半ハ其内と挾ひモノ○延喜式ニ酒匱匝都婆匱あり儀仗帳ニ波佐布ト
モアモト堂上元服ノ調度ヨ今もはゞとトムリ湯はゞの属ムコト俗ニ歎ぐるみ
の眞ナカシヒト謬ミ称セリ○うつ不物語ニ白毛ノ力ノ引シタム白かひの毛丸箱ムト
スル

トニズム

和名抄ニ匱トトミテ半拂の養俗用稼字所出未詳トムリ拂あり

トニズム

和名抄ニ匱トトミテ羽根也トスシトムリ○鎮^{アハシ}ノシホトムリ六鑄^{アハシ}トモ鬚^{アハシ}

トニズム

續紀宣命萬葉集ニアシムトム和名抄ニ阿婦モトム字彙ニ母称曰
娘^{アシム}○西国モトカクトロヒ長寄^{アシム}トロヒ佐賀モトアハ出羽モト
ナカトアシムアヒハ阿妣^{アシム}トアヒリハ阿母^{アシム}ト一嫡母ハ父の妻^{アシム}トモ子
を生^{アシム}ト夫妻^{アシム}トモトム^{アシム}ハ繼母ハ父再娶^{アシム}ト妻出^{アシム}母ハ幼^{アシム}ト他^{アシム}の家^{アシム}ト養育セ
ラレ^{アシム}者をアシム慈母^{アシム}ハ所生の母死^{アシム}ト後父妻^{アシム}トて養育セ^{アシム}トモ^{アシム}者^{アシム}者^{アシム}
嫁母^{アシム}ハ己^{アシム}所生の母父の死後他^{アシム}ト^{アシム}者^{アシム}也出母^{アシム}ハ實母^{アシム}ト父^{アシム}也出^{アシム}セ
者^{アシム}ト^{アシム}庶母^{アシム}ハ實母^{アシム}非^{アシム}ト^{アシム}父の妾^{アシム}の我兄弟^{アシム}を生^{アシム}ト^{アシム}者^{アシム}ト^{アシム}乳母^{アシム}ハ所生の母^{アシム}

トニズム

少^{アシム}の草^{アシム}トモアシム

トニズム

カモ^{アシム}トモ夢^{アシム}トモアシムトニズム

トニズム

續紀宣命萬葉集ニアシムトム和名抄ニ阿婦モトム字彙ニ母称曰
娘^{アシム}○西国モトカクトロヒ長寄^{アシム}トロヒ佐賀モトアハ出羽モト
ナカトアシムアヒハ阿妣^{アシム}トアヒリハ阿母^{アシム}ト一嫡母ハ父の妻^{アシム}トモ子
を生^{アシム}ト夫妻^{アシム}トモトム^{アシム}ハ繼母ハ父再娶^{アシム}ト妻出^{アシム}母ハ幼^{アシム}ト他^{アシム}の家^{アシム}ト養育セ
ラレ^{アシム}者をアシム慈母^{アシム}ハ所生の母父の死後他^{アシム}ト^{アシム}者^{アシム}也出母^{アシム}ハ實母^{アシム}ト父^{アシム}也出^{アシム}セ
者^{アシム}ト^{アシム}庶母^{アシム}ハ實母^{アシム}非^{アシム}ト^{アシム}父の妾^{アシム}の我兄弟^{アシム}を生^{アシム}ト^{アシム}者^{アシム}ト^{アシム}乳母^{アシム}ハ所生の母^{アシム}

代まで乳哺せ者也已う實母を合て九母へ西土へ乳母も三月の服う我邦へふ

一〇古語拾遺よ古語大蛇謂之羽々とえら

む 祖母とく教民要録よ婆と長孫氏年高無齒と云ふ新撰字鏡

母方のたゞアキスラ○小兒乃糞とはくくと唐話とらす○イハ獨りてぞ

くふかの重き也

日 暗をひて絹布よらの羽端のあまう又とほりの略語とひる新撰字鏡

よハカミテトマリ

をむ 難又拒又沮とよもはやる意通ア新撰字鏡よ彈撃とけんかふ

せるとく詰をけんかふとよも難問の意也

日 古事記よ天香山之天婆々迦とそそり式よ大和國有封社小仰て殊
進ら一ひとと奥義抄よ大和國笛吹社よりなるもしく此社へ恩海郡笛吹山
よあく和名抄よ櫻桃一名朱櫻を訓せうされハクシズモ同物云ばざくともす
同一堺襄校よ合歡木と云對馬牟田氏の説よすれ今のみ即櫻也平倫久の説
よハ犬櫻よ似て花さうぬ物のり葉の赤き物をひて今姓よ波々伯部をけん

とよもり大平記よアリ

ちきくと 今及和名抄よ脛巾をよもよまく行纏とすのうく佩のそとらつ幅
も同レ日本紀よ脛裳をくべきもよも今乃脚絆も同一○山城國太原の
薪と賣女の脛巾の前方とて合せ結ふ昔建礼門院此山に入せしと薪と戴き
下山あるを人買へきとらへ頓てうしろむせすも其餘風也とらす○刀ふくわ刃
纏の轉せるも一盛衰記よ脛巾金く元ゆ鉢をよむ心得とく

はやかみ

新撰字鏡よ惄をよもり日本紀小難字重字をもよもり○一間よく

ぞかふもとくははひくるの轉也○もくろの閑ハ奥州とあつとく源宣方朝臣

の陸奥守寶方のりとよもひ遣へりる歎アヌの罪あくく下さりるも

ちくみ 聖武紀の詔よ淨く明けと心をりて婆々ガ比供奉とええら

アシノ意あく○灰ハ土火の名よ字書小死火と注せう新撰字鏡和名抄同一又
字書小死もよもり○和名抄よ本草を引て洗衣黃灰あり燒諸葛藜練作之又捨灰
あり燒榦木葉作之並入深用今按俗所謂椿灰等是也とええら○承和五年兩灰

秋有年俗云是米花也トスミタニ明和の初年京大坂トスミタニ五月の初灰トスミタニ○古事
仲哀記トスミタニ真木灰納トスミタニ亦著及比羅傳多作皆々散浮大海以可度トスミタニ延喜式塗
色料トスミタニ真木灰八斛トスミタニ或ハ被灰トスミタニ魚を浮トスミタニ鎮火祭祝詞トスミタニ更生
子水神トスミタニ國語トスミタニ夫苦飽不材於人共濟而已トスミタニ少釋紀葉盤トスミタニ柏葉トスミタニ盛
物也トスミタニ葉トスミタニ海トスミタニ浮トスミタニ箸トスミタニ魚トスミタニ供トスミタニ意トスミタニ

も

偽荀トスミタニ延芽トスミタニ荀譜トスミタニ小竹根傍出似荀者トスミタニ

も

延指トスミタニあつまの紫トスミタニはひきトスミタニ万繁集トスミタニ後拾遺集トスミタニ

も

灰をかくよせトスミタニ

紫トスミタニハ一匁深トスミタニ勝の花池トスミタニ物トスミタニある

こは蓮の波悲哉トスミタニ

△もふ
前富をトスミタニ虫トスミタニ岐行トスミタニ蟲トスミタニ縁トスミタニ草木トスミタニ延トスミタニ万架
集トスミタニ蔓延トスミタニ靈辭トスミタニ亦延トスミタニ○平家物語トスミタニ鱗トスミタニ魚二三千
もふく又平家の船の下トスミタニ直トスミタニ通トスミタニとトスミタニみ帰トスミタニ通トスミタニあれトスミタニ鳴トスミタニ○屋造トスミタニ和名抄トスミタニ搏風板トスミタニ山城清水寺トスミタニ

破風トスミタニ

はふき
古今集トスミタニ山トスミタニ羽振トスミタニ身トスミタニをトスミタニ古語トスミタニ○神代紀トスミタニ羽鞆トスミタニ吹皮トスミタニ鳥トスミタニ用トスミタニ名抄トスミタニ萬葉集トスミタニ朝羽振トスミタニ羽振トスミタニ新撰字鏡トスミタニ是トスミタニ同續紀トスミタニ詔トスミタニ賜トスミタニ身トスミタニ捨トスミタニすトスミタニ古事記トスミタニ大君トスミタニ鳴トスミタニ是トスミタニ俗トスミタニ物トスミタニ捨トスミタニとトスミタニ古事記トスミタニ打羽舉トスミタニとトスミタニ古事記トスミタニ打羽舉トスミタニとトスミタニ

はす

神代紀トスミタニ祝部トスミタニ姓氏錄トスミタニ建角身命之後也トスミタニ少熟田官符
○神主外正八位下祝部宮麻呂トスミタニ熟田宮の祝職トスミタニ本土師氏也大祝トスミタニ尾張
氏祝トスミタニ神饌トスミタニ神供人也羽振トスミタニ羽トスミタニ衣袖トスミタニ立トスミタニ袖トスミタニ意
ふうトスミタニ又鳥の羽振トスミタニ羽振トスミタニ萬葉集トスミタニ華トスミタニ神トスミタニよもよ
モ奉トスミタニ神代紀トスミタニ莖字トスミタニ讀トスミタニ○和名抄上野の郷名トスミタニ祝人

とあり○諏訪の社より擬祝部副祝部あり

南富鬼俗より児が児の児おどる鬼と云う○雑遊より云ふて天
かの遺草アシハシからむと云うかと云うふともいふからうれやうくことを母子のむつひを教
わるりふと文徳實錄の母子草と云ふても考究一 日次記より這児アシハシへも
の撫物アシハシと云う

万葉集より祝子アシハシとす祝部より同うさて賢木立アシハシと袖アシハシとす

新勅撰集より

神垣アシハシよ口ふと深の衣アシハシと紅葉アシハシよはりと人やはりこ

諸社の祝部皆黄衣アシハシよ知アシハシ熱田の祝家も近き比まで黄衣アシハシと云う

津衣を着又大紋の布直衣アシハシを着と云う古の姿アシハシと云う

はひアシハシ 神代紀より昆虫アシハシと云う和名抄アシハシ跋行アシハシをりとよもう飛虫アシハシとももうハ
雄略天皇の御歎アシハシは蜻蛉アシハシをもけふひアシハシとよみとよもう飛鳥アシハシとふうとよもうと繼
体紀より飛天アシハシ之鳥アシハシをとぶと伏地アシハシ之虫アシハシとくもくことよもう○大殿アシハシ祭アシハシより波有虫アシハシの禍アシハシ
と云う上アシハシ代アシハシ國荒アシハシく家の構アシハシも陳アシハシまとい昆虫アシハシの害アシハシありと神代紀アシハシ小も昆虫アシハシ之

異文えく古事記より醍醐命の蛇室アシハシより寝アシハシと云うも是也○中臣祓詞より昆虫アシハシの災
と云うハ犯罪の部アシハシあれハ自然アシハシよりある事アシハシと云うが云う後アシハシ世アシハシも有る蛇アシハシを祝アシハシて災アシハシを
ぬす事アシハシと云うと云うて貞觀式アシハシより高津神アシハシ高津鳥アシハシの二アシハシ無アシハシて直ちアシハシより昆虫アシハシ災畜アシハシ
卧アシハシと云うてあり

をふたつ 枕草紙より拾芥抜苗アシハシノ部アシハシより葉アシハシ二アシハシと出アシハシ江談アシハシ朱雀門アシハシ鬼苗アシハシ
又青葉アシハシと号アシハシ四十訓抄アシハシより青葉アシハシと別アシハシ鬼苗アシハシハ源博雅アシハシの相易アシハシと云うて
いふ後アシハシ尚方アシハシに入アシハシ

くふ 万葉集より延アシハシをとすり袖アシハシをと系アシハシをとけるふと日本紀より組アシハシもとすり
はぶふ 侍字アシハシをとすり又とくアシハシふとくアシハシ神代紀アシハシ在アシハシととめアシハシとくアシハシと云
くアシハシと秋アシハシの辞アシハシと侍アシハシとあるを消息アシハシより候アシハシとある源氏アシハシはづアシハシたうぶアシハシとある
へはづアシハシとあるの義也

くぼアシハシ ちの羽アシハシのねれもとをとアシハシとすとアシハシ

くほアシハシ 神代紀より濱又汀アシハシをとす新撰字鏡アシハシより謂アシハシもとすり端海アシハシのあくアシハシと云う○
基アシハシ濱アシハシとすも濱アシハシの真砂アシハシの意アシハシと云う○後撰集より

仁吉全集 卷之二十四

廿一

白浪乃うちや人ともとまつからし濱の真砂の数をつりる。

ナミシナ基とりとせても又為業の致】

うちかける手波のやくもふとてども濱もみこむる

○寝歎をはぬとくへ歎間の矢すや○たぬこへ濱曲也とえづへ濱曲也

けぬり、

徒然草より類聚雜要は濱床の常は帳基とふとえぞ新撰字鏡

よ提とよもり又搭をとみれ心得くし倚子かとの様とて高欄かとのあるもあつと

らう雅亮抄より高さ三尺許とえぞ

とぬびき

伊勢物語真名本は濱久とありまたとくに万葉集の致とはまびさ

木とあそハ誤ねく真名本ハ木字と脱セトものより定家卿もかくもく一

詫濱邊の家居をよ一説は渚よ波の折寄る引る跡の家乃ひきく似するをも

てくふくふ心得く

とぬづる

病よらふ食復の翁也字景宣は瘦は病重翁也とよもく新撰字鏡よがく

やくとよす

とむ

食とよ万葉集ようくもべうくわべとくえゆまみむらもそはくけ

やくとよす

又寒とよみ靈異記の咬とよもり喰公能食飽の音餐とえぞ新撰字鏡よみ同○和
名抄工體を訓せり漢人の説は鱈魚頗似蝮蛇とくし蝮蛇をくみと訓を轉語
ちほし今くもやつめうふぎ是也とくろ新撰字鏡よ艱をよするハ二合ふる○
加賀うてくもとくの大蛇へ大双紙よもとくの海鰻也○長寄よくわむく餅
近年法と西土人よ傳へて大抵饅頭の制のくへ又ひやうどくと呼ア○辭よく六
黄豆も季じひけくもぐひほくもじのれ也

△もみ

令食の翁も伊勢物語よきつよくもみでとえぞ孤くゑとの翁えゑる友
まく○もみをはすとふくふ俗語は物の端食ふとよう出るみゑー○源氏よ

ふえはくらふくもく皆色のまよつて今も黄豆も赤ももくらう食のかふ
る

△はも

語末よくおねてのあそけの霜のうつても草のもつふやえく君のもの霜
ハ霜のう者ええー君者と問の詞うへてとへやくするやくするを霜のうえの
鶴の毛衣ふとよもくもくとく○魚よくふ海鰻の唐音とくひはの轉くと
らう小あをくんぎくとくらう言くもくとくわ

伊 言 卷之廿四

そりうかえ

基俊哥合の判よりの神をもくせの葉と守ふ神よりくく

弘仁式三絆柏の條よえそくとらうくれ葉盛乃神の香よりて實ハ御饌津の

神をアするや萬葉集よ

越前氣比の神と日本紀苟飯とあるも世事も三新古今集よ雨中木

繁とく心を藤原基俊

玉ノへゑりりよりふ五月雨よはりの神のあめもすうて

漢書よ栢者鬼之矣也

△はや

嘆乃辞よひ日本紀よあふまもやあづまもやと吾嬬者耶とも音夫

何怜ともせり又放りあくたくみもや万葉集よ君をふくゆすもやつる又年
もやもく相もくかく又折ぐや折ぐのくやと同一源氏よから者ともれあつや
とばく又五節三そらうたけゐくへやとえう拾遺集よ菅家

君う住宿の木すなをばくくとくみくすてようえくはや

○古今集よ今へはやくひきよすくを拾遺集にえくよくやうじよをよの教ハ俚言

のものやの意○心みりもや人ともりがやなり濁る一頬ひ葉ふ意のよひくくと
○口語よひふ便字を譯ミ早ミ失ミ

はやす

△はやとくはやにりてもやすしもとと取るもとふくふ令映の

又やす反^レ映の多自他の異^レ○草木ともやもとくふ令生の系^レ○音曲よひふ令映
の系^レ呂氏春秋よ今人舉重出力者一人唱則為號頭衆皆和^{スハヤ}之曰打蹕^{スハヤ}とく
音頭囃^{ハヤシ}方ともく節分の夜豆をもやもくも是^{スハヤ}○割烹よきくはやともく
ふくひやとの轉^{スハヤ}○元服^{スハヤ}髮をもやもくもく本をもく^{スハヤ}反語もく^{スハヤ}
もやく^{スハヤ}
林とよもく生そのまへよて俗よもくもく^{スハヤ}○日本紀よ取擧棟梁者
世家長御心之林ともく萬葉集よ吾角者御笠のはや^{スハヤ}吾寃者もふすくもやく^{スハヤ}
ともく^{スハヤ}映す乃^{スハヤ}○林小林の姓^{スハヤ}大平記よえい○能もやく^{スハヤ}囃^{ハヤシ}字とよみ
ヨ^{スハヤ}説文よ助舞声と^{スハヤ}年始^{スハヤ}風流をはや^{スハヤ}物とも^{スハヤ}年埃囊^{スハヤ}故よえく^{スハヤ}
鼓吹の意也鴨長明

林寄よりくへくへ通^{スハヤ}一鼓乃嵩を打ふ^{スハヤ}

林寄ハ伊勢の内宮よあく或ハ拍子の音轉^{スハヤ}○早速とよもハ羽矢の家^{スハヤ}

助語より靈異記より遡をよみより速くと注を神代紀より急峻をもすあり歎
ム今ハトモ秋ハはやふとしより又とやくとらすよりとよろの意とむの意とあ
源氏よりはやくとえり新古今集辞よりはやくとくらひ昔とくらり如
一出羽よりはとくとく○姓よりとく盛衰記よりえり

そやち
神代紀より疾風又迅風又奔波舊事記速飄和名抄より暴風とよみう今は
やて暴風八月の風也陸奥うて駿河へとくふ鳥家卿

ふくちむ沖のはやてやつよく生田の磯りともる釣子ね

はやふ
速を用ひる辭へはやり男のりう武者心のはやふふと是く物とひ
はやうてとく詞寶物集よりえり○世より流行る車をより速く行ふ之意か
ヨリよそ時行どよみう又發行ともう

そやなつ
八雲御抄より川をくすりえ喜撰式より諫河時もやたつくふとえり

そ速立のをくや堀川百首

候瀬ともせこりぬもやたつのみまくわる川のふれ

此故より川とよまれりもやたつ速滝津の畧ふつゝや

はやうね

和名抄より舸をよみう立鳥船鴿船あり今しう閨船に新千載集より

そやあくわ

初矢房矢より一矢ニモチを一手とくの矢とく詞へ西土

の一手ハ矢四條くうじか物語より

くく羽う名乃がとやうもきこゆあひぢくじく比もあつ

そやさあめ

新撰字鏡より凍をよみう暴雨也とえり出雲風土記より波

夜佐雨久多美山倭姫世記より速雨ニ見浦とくに皆枕詞へ神名或阿波國勝浦

郡より速雨神社あり

△はゆ

生字映字とよみう万葉集よりゆくとよみう拾遺集より

△えよ

原ハ日本紀より開をくくとよみう意へ築紫人へあるとくふもひて

高天原蒼海原豊葦原ふと皆廣平乃をくすみへ万葉集より國原ともえり説文
より原高平日原人所登也くえゆ○日本紀より林ともよみう竹も松りう擣りうふくい

ふ夏くどりて○腹ひ人身中の原とくふへー武備志よ肚を下らう○夫木集為家

鈴鹿山関のまゝる花薄袖すりはくたきぬくらむ

是の闇の近きあら原村あつ野廣く薄多き所あれひよるふるー○神代紀
1癡とよみう人の腹よ似るべ西土より瓶え大腹小口ふくふくえうり○源氏小
五六のまゝる機刺とく琴の手え五六ハ絃うて一絃ハ散声一絃ハ按声二絃一
声れく^レ彈むをくよえうり○姓よ原あら花管三代紀よみゆ

はくむ 妊娠をくふ日本紀よ姫身所懷所娠有身有眼ふくをよみう腹産
の名^ニ○族囊按よ人の母胎よ在時第廿の七日よ至て人相皆備て手を以て面と
推て蹲踞^{スル}坐すとく禁河の書守混沌之始の傳よ同^一○系圖をくふ何
腹^ニ日本紀續日本紀ふとよくえうり母家よよりて氏族の別をとく
辞^ニ○俗諺よすらと踰てもはくひとくわやうらの袴のやうく日本紀よ易産
腹者以^ハ禪觸^{タラ}牀^ミ即使懷脹^{ハラム}とえうり善見律よも懷胎七種と立て一者身相
觸二者取衣とく

はくろ 和名抄よ鱗魚とよみうされと所出未詳くらひう新撰字鏡同^一

又鼈と訓さる江次茅官曹事類風土記よい鼈也とくう式よ腹赤とちうら小あの
音こもれるをりそくうとくう腹黒の反るれ^ハ腹赤の贋を奏するも赤心の表示
ある^ト神代紀よ赤心をきよにくよくよくあり元日よ腹赤の贋の奏あら^ハ聖武
天皇より始る年中行事の歌よ

もう春乃千代のたか^ノの長濱^ノけむくわうも我君^ハまく
長濱^ハ肥後國より玉名郡長渚濱^トり出で尔倍魚と号^ミ今北濱^ノ鯛^ト焼
て賣^リ景行天皇の政事^ムよ^ト風土記よ^ス今其所^ト腹赤^ト供^ハ
御の池^{アリ}○伊勢国河曲郡^ト長太村^{アリ}此村より大神宮^トけくうの御贋^ト
献^ス轉^ス也○東原腹赤後姓^ト改^ム都^ト三代實錄^ヨ又少二人とするハ非
ちふ 神代紀よ驅除又撥又拂^トよみう羽^トり出^クる詞^{アリ}ト^ト新撰字
鏡^ノ件^トよみう除^ス也と注^カう

はくひ 神代紀よ解除又祓^トよみう廣韻よ音拂^ト又毛詩よ祓^ト弗^トモ
作^ムされふつの音あうを祓^ト通用^ムくがつの音とせり訓^ハ拂^トと名目ふくひ
神代紀よみうる伊弉諾尊素戔鳴尊ニ大神の御正^トを合せり^ト後除身^ノ

和名抄より勤壯巾をよりて腹纏と西宮故裏書より扶桑畧記大原野行幸鷹狩より諸衛官人著褐衣腹巻行騰と見えり○兵家より鎧のれん也胴の板を小さくまく鎧よてうけ疊見足のくく錦嘴のりくと鎧番ありて前よりあてて着へ後より引合せ紐にて結ふて庭訓より宿直腹巻又番具豆とくらべて○船のくろとくろと廻りあしる綱ともくらべ

和名抄より痕をよりて兼好がばきまくみの腹すくらべては東坡より事腹巻とくろ星く出羽の俗に腹がくつちいとく

針とくろ鍼も同一穿け轉くらべて名義集より曲鉤と翻へて姿利としきともススくらべ針をくろも棘針とくろも名同○童蒙頌韻より接をくらべ家材具也大般若より梁をよりて○梵より頗黎とくろ水晶とくろ本草より別より出せよ又くらべやの内の國より造玻璃極佳甲子天下とくえくう妙方にて水精の琢磨とく頗黎の琢磨とくろ俱よ五色ありて其品かのづくみてや○世より淨頗黎の鏡とくろ佛經より碧頗黎鏡の梁四公子記より又頗黎鏡とくろ幸も物云々とくろ又千里鏡磨玻璃所成者と云字通より琢磨とくろよあへ

又中山傳信錄より西洋舶用玻璃漏定更簡而易曉とくろ
禁祕抄より張児とくろ今のもみこりや○張蘿の名もあり脱紗くろどや
○児女のりてあそひの大けりて婚禮の具の御どにの大代の故事よすれ

はくま 播磨とくろ古事記より針間てゑや新猿樂記より播磨針とくろ赤深衛門集よくやまとくろ考る人針をれことくとくろえられへ針よりる名あると相撲のくろまわげあく

ちくま ちくま 破邊の岩のけふくてちのとくろ仲津白ふく
日本紀より秦摺衣とくろ大嘗會式より棕藍摺錦袍とくろとくろ棕摺と山藍摺と二事あるよや

ちくま 春の發の名万葉集より春の張乍とくろ後の秋よこのめくるとくろとくろ
と○秋の頃より初春早春とも早春初春とも次第せうかんして同意よす一○墾とよ
むも發開の名へ治をよむも玉蒲と墾へ治也とくろ張も發の名へ皮よ幾張あく
らう又鼓よくら周禮より鼙鼓も同一冒音曼也○倭名抄より府庵腫

をすもも音同一○發へ開とるきとすもの音也○札ふくらむとらひ貼字く○古人の名よ春風月影兄弟の名いと艶也魚名公の曾孫也○人を打とむことしる。張の意も一良基公神葉日記よ神人をもくらむもマレバミリ○名よ玄とよむへくるの音へ○まつるくまづくるまづくるふとの助語よくみかとの音のマヘふ及ふ也

はるき 日本紀よ開をすよりあくべ音通フ

ちるく 晴とす開晴の音く○新撰字鏡よ霽をひむれぬすより雨止てく

き也

ちるく 遥をすより悠も遠も同一又懸りすより開字は意放よすりけきともすより日本紀よ玄もすより靈異記よくもすりもえり

ちるく 万葉よ春之在者とちるくスルテシテハモトヨムアヌカニシ
と獨モトモハアヘ○秋モハ冬モハの詞ありて夏モハの詞モタキハモア
マテ朝ハベトムタコサヘ

くるの音く 吕の調とすハ催馬樂乃呂よ新年梅枝櫻人ふくとまく

はるとあくねむ 源氏よ女へ春をあくねむとすくう詩よ有女懷春吉士
誇えとくべく

△これ 俗よクルの衣服ノルの座席ふくらひ法例の音く○語の辞くも

じうす催馬樂よえとくう○晴腫ふくをくふもくる也

△ちるく 皇極紀の歌よもくくよ琴音よこゆる万葉集よもくくにた

むへのうもとえゆ皆遠也

△ちるく 安閑紀よ備後國葉若毛倉あく東鑑よ伊勢國葉若とえく

鈴鹿郡の邑名也神寫秋くとえり

△とく 領氏よかんや紙よかの綺をくわしてとえゆ裱褙の褶もくへ配よ
ても通せり

△おあよ 配所よく配流の所ばくは罪なくして配所の月次えがきぬとく

りある言々河海よ野相公在納言管家西宮左府帥内太臣抜群の才ありて罪
ふくへて配所の月よ叛く人勝て計くとくとく

△とく 日本紀よ蝕字を訓せり日月の蝕の虫の木葉を食ふくふれひ食餌の

金川正大

卷之二十一

廿八

キヨシ一俗ニタガミトコトノリ日蝕月蝕ニ禁裏御坐の間を包ミサム
る事御湯殿の記ヨリスルト〇舶來の品より蝕儀あり

△トモトモ
羽音の新也新撰字鏡より舶をもねあらそめり

倭訓纂前編二十四終

